嘉多比沙志

上

内閣文庫
和書
類 一八九五七 號
冊 六
函 三三
架 一ロ

内閣文庫
和書
類 一八九五七 號
冊 一
函 二二
架 九

漫筆雜考 西

内閣文庫
番號 和 18957
冊數 6 (4)
函號 212 111

国立公文書館
National Archives of Japan

藤原彦麿隨筆

嘉多比沙志 後集 三卷

東都書肆 文永堂發行

傍廂編 卷之上

藤原彦麿隨筆

たくゝゞ

神武天皇神祭ゝ給ふ折小土器頼造給ふ中小手抉と
ゝ物御紀ふあり抉を以手指剔抉也和名抄に觿。久自利
字鏡に則剜久自利恵留とあるまゝ指先ふて穴を穿つとゝ竹取物
語にやゝの孜ふ出ても穴をくゞるとかゝるのゝ孜ふまゝまゝ入あ
へりゝ左の掌に右の指先ふて穴をくゞつゞ如くにくゞまゝ
窪くゝる土器ゝゝゝゝあり二倫神祭ふてゝ右の肘まて左の掌の
土を臼つく如くにくゞまゝ浦きに茶ゝゝる茶の中ふハ肘の肋

骨の疏あり底ゐ左右の掌の理文こゝ多し

南方退治

元可法師俗姓は下野国の住人某師寺法師なり射技に公義
もゝ心もゝふみやびふして優なる人なりかの元可集雑の記は南方
退治発向の時は天王寺ふて人々頸をさゝげて哥よみける時旅友
といへとよみそるとて引あり暮れ夜天王寺ふやどりてあくれ日
い楠正行正時兄弟と対面ありしかとも心あとゝしうゝ
とかく探頸ふて引ゝとて遊べゝ武備ゝゝ中いあゝびゝの時の大将い
高武蔵守師直同弟越後守師泰なり惣大将は足利尊氏公
あり行ゝも佞奸邪道の人ゝ中ゝびゝ宮軍ゝむゝひて戦ゝゝ心ゝゝゝ

思ひてのゝあゝんさゝ有ゝゝ早く世をのゝれて出家しゝらん
そ世をさゝゝゝ時ゝ「ゝゝびゝしゝゝ私ゝ人の数ゝゝそゝゝ
ものゝ弓矢ゝゝけゝとゝゝれゝは佞悪の尊氏公直義おゝふ
隨ひ官軍ゝ向ひ引ゝゝし出陳せそゝゝゝ居ゝ穢病末
練といゝゝん所詮弓矢とゝゝ佛門ゝ入ゝゝゝゝゝ公
義のゝ新後拾遺集ゝも太平紀ゝもゝ家集一巻あり

静前ゝ勇氣

源義経の妾静は武勇の女ゝて堀川殿討の時ゝ義経酒ゝ酔て
はゝだゝかゝぬと静ゝ潔て甲冑をきゝゝゝ義経紀ゝあゝその
次第けゝきゝゝゝゝ新田義貞朝臣紀ゝひゝくとあひ

て遠い孫ハ師翁貞丈大人も甲冑著用次第ハ元用ひられそう
義經流浪の後稀も源氏へめさまして遠ひ舞ーける時ハ梶原景
茂源與の人ハて静と犯さんとしるハ稀いうて云く我ハ源二
位の連枝る豫州の妾ニ汝ハ源二位の臣下なり豫別況倫ぜぬハ
汝ニ元我ハ對面するもあさけといひハ景茂恥て閉口せり
東鑑ハあり

以牛祭神

神祇正道ハ於てハ牛馬犬猿鶏ハ人ハ畜ハ人の用とさて放ハ
繩て殺ハの稀あり食料ハ稀ハ後漢書ハ以牛祭
神ハあり廣州記ハ殺牛取血和泥塗石牛背祀ハあり

も真の神ハあらぬ牛馬も稀ハ天竺ハて人を祈るハ
以牛糞塗場地以牛乳酪食法師といひ皇朝ハて人ハ稀
とーていとさる故ハ牛肉ハ田人ハ食ハあらぬ時ハ御歳神いうて
給ひて災あり事ハ古語拾遺ハあり支國れ
風義ハ法ハん皇極天皇紀ハ隨村々祝部所教或殺牛馬
祭諸神社云々　桓武天皇紀ハ断百姓殺牛用祭漢神云々　自
然と風義ハ

雁金

雁とかりがねとも云と心得て雁金の字ハ即雁のこと
と雁ハ音といひハて古今集ハ雁ハ孫の笑ハあまとぶ雁ハ孫

のなくとも猿が狐の姿となりしはなく猿の姿として
あまさとよめりさる故を万葉集は秋風は山とびこゆるかりがねの
姿をさへ雲がくろしとあまざかる中によりては人くらうぬらや
かさ狐にて浅く猿の子がかりその尾などのくらびなるべし

困快止動

或学者の曰く世は困快止動の誤りし事なり狐のコンとなくを
歎鳴といひクワイとなくを愁鳴といへる誤也コンは困にてくるしむ
なりクワイは快にて心よきなり又馬をつなぐにシといひて追ひやらし
らせドウといひてとどむるも誤なりシは止にてとどむるドウは動
にてうごきをしらするなりといひしを猿といひて猿とふべき

事なり狐も馬も学者なかればき字義をのべ狐の姿
を悦とも愁ともいふめれども馬を追ふもとどむるも浅く狐に
いひなまよる鄙俗の詞にてシイくといひて追ひよる事腕に
万葉集に馬の事を曾止毛於波受とあるハソといひて馬を追
しなるべし假字書にもソの一言は追馬の二字をもかけりド
ウハとどまるといふ事なりすべて牛馬犬猫のよびいは里俗
の方言はよく聞ゆる物にて其意を得れど字義をば辨へず

大塔宮

尊雲法親王還俗し給ひて護良親王と申を大塔宮と申奉る
を世にオホタフの宮と申せど音訓せずしてはあるべからずダイタフ

の宮と申奉るべきなり此宮石を立せられ申あるいまて北
條高時弑し奉るゝんとせし故に熊野の方へ落させ給ふと云に南
都の般若寺の大般若経の唐櫃の中に かくまさせ給ひし弑軍
勢有り経櫃とさゝげ入て大塔の宮に入らせ給ひぬ大唐の玄賓三
蔵とそ かつけまと戦まて一同に ひてかくれ給ひし波太平
紀に あり大塔大唐の故の戦まなりこの玄賓三蔵法師は唐
太宗の時の人にて西域より十七年の間に百三十余国を遊
歴して唐に かへまり六百五十七部の経文を翻譯せ人なり

軍神問答

師翁の軍神問答は古今未発の論なまべいとなくあり

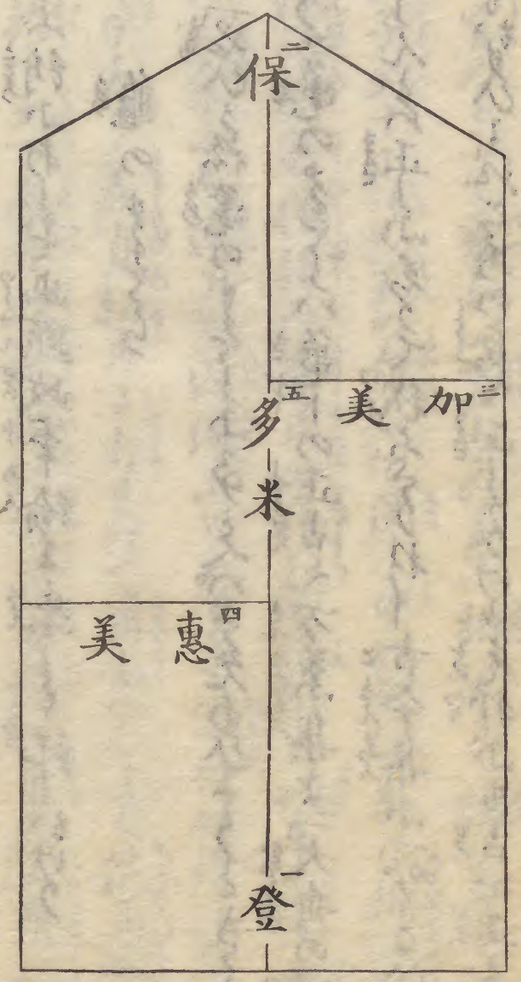
かゝる所に有用の卓言なり武士なんと者は是をいあるべきなると
中に大ぐ一箇條弑心を諾ひ奉り武人の間に楠正成を
良将にして忠臣なるゆへ古今の人の知る所のごく武道に於
て一事の不善なりしとも功を遂ずして討死せり軍神
の加護なりしは如何とある先生の答へに此事を天命と給ふ云
運なり天命は何故に依て彼の如くとなるゆへ人智を以て測るべ
からず聖人も天命を恐るゝとのまひあり云々彦磨云
く是師翁の誤なり外戎は神あるゆへ弑逆非道
をなすに天より命令なるゆへ隨ひ奉るとゆへ大罪をお
かすとなく必ずまんとかなへる道異なまるけるなるゆへ天

地ち形容のごとふて霊ふし霊ちけまび物いまそび物いまそび命令
せまで孔子五十ふして天の命令と関しゆおびつつあり楠正成討
死して軒伎関東徳弱の尊氏公勝利を得る十五代までも将軍
職えしい天令ふも運ふも因縁ふもあるまで軍神加護しるへ紀
加あるゆゑり義貞朝臣よ打まけて西国へもて筑前国宗像
神社よ祈て天下泰平朝敵退治万民安穏の手紀大祭祀紀行
ひ大軍を率て上洛し給ひし加ふ正成卿い湊川ふて討死しゆひ
義貞朝臣い北国へ去て次の年よ金崎ふて亡びゆ奚貞朝臣も
尊氏公と和国まで追付ゆ又い加茂石清水おどふて手紀大祭祀
紀ふひ給ゆ一つ叫かる拙き敗軍いあるまし一つ忠とつひ勇

といひる氏公ゆ十倍勝ましし義貞朝臣ふ神加護び勝利能び
あるべしざると武勇智略よ縛て勝利ふ心とあて勾蔵内侍よ迷ひ
酒宴淫楽とゆ一せられて手紀神祭ふ心附ゆ加る軍神の加護ゆ
ゆ一つ紀の汚ひの善悪邪正とたぐそ顕露の政道之神巫政ゆい人
智の及び所ふあるまで幽顕政事綸よ乗しく紀しかけり

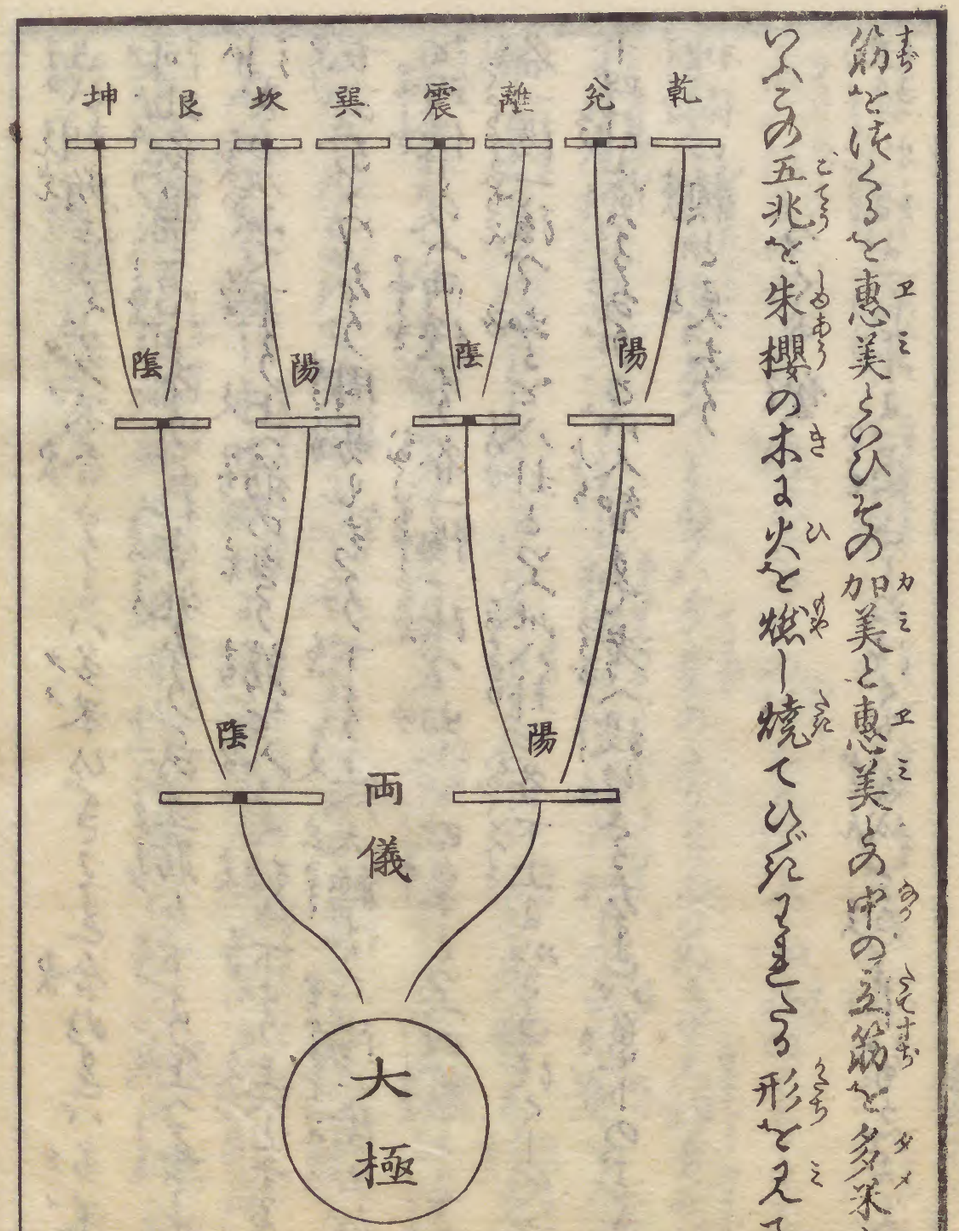
龜のまきら

師時の「呂ひ」ふ龜のまきらふ考べ勝紀
紀とある龜のまきらい龜トの正占之万葉集よ「大舟の渡ゆ
ふふのうんふ正ふゆて我ふ」古今集ふ「かくこひん拙
ふ我もなひ紀ふゆ紀ふの占で正とし



次にまことなりなるあひとうとへ亀卜の五兆の中のかさのあるうれ
時よりまた初なり五兆へ亀甲の正中より立筋を附る下の方を登
とうひ上の方を保とうへ筋の中央より少し上の方より中より右へ横
筋を附る是を加美とうへまこと中央より下の方中より左へ横

筋をしくるを恵美とうひその加美と恵美との中の立筋を多米と
いふこの五兆を朱櫻の木を火を燃ーー焼てひびれてまこと形をえて



占ひ判断はなはだ多采合はうとは多采ひきはなれと合ぬまぜ多采
阿比多里と唱へはうこれ吉兆なりこの立筋を下より上へ書て
ひき小刀小て下より上へ筋の色う筋を入るこれを下より上へとすぐ
古へのかつなり周易もかつなり下より上へ大極より一陽一陰出て
と両儀なり又両儀より各一陽一陰で出るを四象とし四象より又
各一陽一陰で出るを八卦とし八卦を各下上よりかさねて六
十四卦となるなりこれ人智はて考へ設けるなるべ亀トのごき
神術の類と見たり

つくも髪

伊勢物語に百年に一茎なりぬれどくも髪我と思ふべかもうげよこも

此はくも髪ハ古より江浦草とも馬尾藻ともいふる説あれど我説
是入絃支の考なるしはくもの説あるべしつち物のこちつなぬ
ちふて紫日紀に天づくあるハ業のようなのぬるの大和名抄に
よ九尾村とあるとてとなる我説敦賀郡角村より出て布と九十
布と出てつぬのとなり云この説なるべし多力彦麿云信友の
考小なりてつも髪なつて百の長ふて百よりこちざる故ふつも
と九十九となて百年に一せなぬい百の一畫なぬ白髪よさ
と人以るなるべし本草綱目に海藻生海嶋上黒色如乱髪云々
又馬尾藻云々近海諸地采取亦作海菜といふい今の神馬
藻穂俵ともいふ

女筆女文

當時世に名ゑるき武書家の女武高貴の御室の御側に仕へぬ
るを早くより秋をめて御欲の添削仰給へ序にその女も学ぶこと
ぶ〳〵るをいづれ〳〵傍に御房なりて云くこの女の父の女はいとふ
へ御館ふて和歌文字をいく人にたりて五習もべ〳〵学ぶ人あべ
隨ひてよこ習へべ〳〵少女の漢歌文字ゑ詩文章はくろへ傍より
はくにくそへめなり和歌文字かきて学ぶむ女いめ〳〵なり
うくそいるものなりといまーもたり諸まりかくぶりの書家ゑ
めづ〳〵紀大先生なり故あるて御館ども先生の名ともあるいぐ
けまど夫ゑこい人もかきなり

武烈天皇御諱名

武烈天皇の御暴惡の事御紀にゑるとそくにこの御代に百濟の末
多王ゑ暴惡なり〳〵人に同御代南斉明帝ゑ二男東昏侯宝巻ゑ
大惡虐も永元元年ふてこの天皇の御即位元年にあたるとべかと
ぐこゑ〳〵そひ〳〵ふ遠江内山ふ於ゑ書紀類聚解巻一神系
部ふ云く二年より八年まぐゑ道奇偉の戯を紀をい百濟王の云
暴虐と奏上一百濟紀の轉て本文とあるまりこの本文上代より誤伝へ
て武烈の諡を奉りて云くとなり扱も我そへ所と考〳〵我の
天皇の御宗よりく御悔涙りしより纔をあげて暴虐虛名一巻著
せりかくも　天皇のゑる霊遥にきこめて怨くも御とろおちね

給ふとそくのこと

いとけ

俊頼朝臣の家集に「めぐる玉よりけるゆいぎたるびあづまの奥よりく
るいとけとよまれしは藻塩草に有る由時主といふ人石霊人とかきあ
を放る矢を射付るゑ即その矢ぬけぞして花咲るゑとよまれる俗
説を中昔いひしと俊頼朝臣談へくかくいはまほしきなり万葉集
ふいもでしこ小瞿麦まさ石竹の字をあまさかまとうり又大蘭洛陽
花をどいふる漢名なり皆おでしこなりきると石竹いとけとよまも
瞿麦とこるむぎとよこと大蘭と大ふぢだら陸ましこ洛陽華とこやこ
だるとよむべきうかくてはなどしことこりてなぞしこふいなりびをう

しをとをり

位服

いふ人は一位より六位までは紫なり一位二位紫なり三位浅紫
四位深緋赤葉の歌 五位浅緋 世の六位深緑 緋の
初位浅緑 世の さると 一條天皇のひより きべて物毎よりぐれて正
暦年中より一位の深紫は黒染よりてうえよ紫とりけて 紛へ四位の深緋
も黒染のうえよ緋とりけて紛へつぐ位の浅くは一位より四位までは打 世て
黒染とありまてうはいをもくくちをきをとをりその位ふいまは
衣服ふをんありけは

林家学風

林道春先生の神社考序より本朝者神國也神武帝繼天建極已来相續相承皇緒不絶王道惟弓是我天神之所授道也まこと同考第二より天照太神以降神以傳神皇以傳皇皇道神道豈二哉まこと同先生文集より我朝禪継有三神器相授受又矣夏鼎秦璽漢劔不足比並まこと西山義公の大日本史序より大学頭信篤朝臣云我國神世置而不論之人皇即位以迄今日百王一姓重熙累洽綿々延々繩々蟄々化郊所及與日月並明至運所繫與天地無疆誠有非夏商周亦所可及也歟矣大矣云々不神德靈妙之所致乎云々中興の大儒先生いまこと比類なく卓見なり茂卿純ぬきの腐儒ハ先生の復下ハ

も寄附ぐさ

七賢人

阮籍 嵇康 山濤 向秀 劉伶 王戎 阮咸 この七人を世ふ賢人と称して褒賞さるゝいまこと故あゝん酒のそなれあるゝより外まこと所なゝ皇朝人あゝべ益よたゞそれのこと接ぶもあり万葉集より古の七賢さき人なるも欲さる物ハ酒ハあゝゝとよまゝ酒の類なるまべき歌ふなるゝ貝原篤信の和漢名數云七人放曠荒醉不可為賢とゝひゝ論なるゝ中ハも阮籍ハ酒をのまゝ人よむひて眼とまくゝを白くもゝて喜怒の意とゝまゝさあれ心ざのくゝひめけあり

近き人蜀山人の狂哥に「竹林に藪改の多き所とも有るべし」
あそび性癖とそうい七賢等が詩文章よりも遥に益まし

下野の花

下野花い和名漢名ともふまびいるまりよりふて下野の国名
とおもせりこん花の色い淡紅と浅紅と二種おまび霜の

傍廟二八上ノ十一

るさるふもりまで又霜中に咲ふもりまで古くい物に元元まで
拾遺集ふう名てうる者ぐふ者ぬ花おまび我おもつげんの
のあやしさとあまびそのひとり名いおまざりまるべ

盗才

師貞丈翁云盗とはむも一種の才なり母の胎中より天才を受
けて徒事ふい云才ふて拙く盗ふい巧才なり人目を凌て食物或
盗むがぬすこの指ふて童友と欺きて既物を奪ふ悪汚の輩
て成長に陸ひて傍長し終に強盗竊盗に至る世俗に貪の盗と
いへども盗才おい老い厭死すとも盗まるるなるべ盗才なる人を高
貴ふして富有なりとも盗まるる時の執政の役も盗才なるい大

禄富貴の上ハも賄賂を以て政事を曲げて行ふ有る人ハ取入る
下司ハも皆盗人なり君のことをまび主人をかすめて利欲ふかく
かゝる風俗ハ流れ時ハ武士ハ恥を忘れて謀計を以て利欲
貪る者ハ賢者と成直忠勤の者を愚者と成武士ハ主君の
為ハ死を恥を忘れ恥を忘れぬ者ハ主君をも食
銀を大切ハ思へ恥なりと云ふ緒も此先生の本心此の
ごと

山本晴幸の明眼

山本勘助晴幸ハ素性後く五体不具なれど系圖正しく剛勇の
士ハ遥ハ遥ハ武州甲斐の諸侍を集めて軍法の物語を
席ハ小兒三人交まり小宮山助太郎小山田八弥秋山友市なり助
太郎ハ終中ゐづまりてよく安居ハ八弥ハ走ひて
居ら友市ハ退屈して変く成を晴幸この二兒とをくぐ
とゝて助太郎を赤心うどの大丈夫ハて八弥ハ走ら宮ら友
市ハ不忠の名をのこもべとゝひ小ふたゝて助太郎ハ後ハ小宮
山内膳と云故なりて甲州を浪人ハまども勝頼天目山ハて生害
の頃ハ義をかへて死を共ハて義を立ら八弥ハ後ハ小
山田八左エ門と名のり勝頼生害の以善光寺へ行ら友市
ハ後ハ秋山内記と云ふ又攝津守ハ任ず勝頼生害の五日以前ハ甲
州を出奔ハ敵方の織田信忠へ降参ハまども不忠の逆賊なりて

しかれば首をきられし晴幸は一眼なかりしと見ゆるなり

幽霊の見ゆる處

蜻蛉日記に僧ども念佛のひまに物語するをきけば此のなくなり
ぬる人のあらはに見ゆる所なんあるさて近くよればきえうせぬなり
とほうては見ゆなりいづれの國とかやみゝらくの島となんいふなる
など口々かたるを聞にいとしらまほしうかなしう覚えて斯ぞいへる
は「ありとだによそにても見ん名にしおはゞ我にきかせよみゝらくの
島といふをせうとなる人きゝてそれもなく〳〵「いづくとか音にのみ
きくみゝらくの島がくれにし人をたづねんとあり昔もさる事なり
万葉集に神亀年中に對馬國へ粮米を贈らるべきよし太宰府

より筑前宗像の百姓津麻呂を船梶師にさされしに津麻呂は
糟屋郡志賀の白水郎荒雄が許にいたりてたのみしに荒雄う
けがひて肥前松浦の美祢良久の埼より船出して對馬にわたる海
中にて俄に天暗冥暴風大雨にてつひに順風なく海中にて沉
没せるをかなしめる歌どもをのせてありこれより對馬への海路
は難所なるべし

あきどう

万葉集巻七に「西市尓但獨出而眼不並買師絹之商自許
里鴨このうたを千蔭の略解には外にみえくらぶる物もなく猶かり目
につかへる女に心のあくところあるたとへなりとみゆ外によくなるべし

物おぼふてまことうい者ことうくとあるいとうぶき歩あるう相図のた
とえふいあるまで市よ賣物の者よりは一人出て相対をぶき人も仕ぶ
あき絹をとうとうとひて價をく賣まて久うてこまいが始ぶ
とう遠ひていとうき絹ふてうくを賣うを悔て商人のまとう
ありといへうあり者とうハ醜賣ふて俗よ云押覆うへ美ふて
ちるうこの賣うづうといへうえ市のうひ拘ふいかうう掌まるあ

額烏帽子

いふへう官人武士い文ありり農民工匠樵夫漁翁ふいうを烏
帽子ふる直垂ふて腰刀さしうる姿古画ふなまうあるがどしまく烏
帽子ふざるはい額烏帽子とひて三角のまき結まき紙ふぶ

額烏帽子の
正面

同
うしろ

同
横むき

てほうて額よのこ者うえ正面うこれば風折烏帽子のごくえ
えて横い者ハ後世よいうて人気うはい生涯一度の大礼ふれば白

紙ふて額烏帽子作りて岩屋の幽昊の絵とかくは額烏帽
子は旁假名のシ文字かくもをり〻夫木集は西行法師「篠さめ
て雀弓をる男のうゝへひゝとひ烏帽子のりげあるかとれい名匂
のりげとゝとゝたぶけるのゝふて烏帽子のみきふいりゝを裳と
りくかまへをり

神の託言

崇神天皇紀は丹波氷上入名氷香戸邊啓于皇太子活目尊
曰已子有小兒而自然言之玉藻鎮石。出雲人祭真種之甘
美鏡。押羽振。甘美御神底宝。御宝主。山河之水泉。御魂静挂。
甘美御神底宝。御宝主也。是非似小兒之言若有託言乎於是皇

太子奏于天皇則勅之使祭之ゝ出雲臣らが大神の祭を怠
るー故の神託ゝまゝ神功皇后紀ふも神託あゝど千意明うて
漢文ふまゝ神語定りたゝゝ復中天皇紀は五年九月乙酉朔癸
卯有如風之聲呼於大虚曰劔刀太子王也亦呼之曰鳥往来
羽田之汝妹者羽狭丹葦立往也亦曰狭名来田之蔣津之命
羽狭丹葦立往也俄而使者忽来曰皇妃薨ゝゝ車持
君ゞ筑前宗形三女神の神願と押願りて崇りとゝ実の
神託なり　國史以下後世の文物語文ふも正ゝ神託あれど式
ハ漢文式ハ千世の俗云ふどふて紀せりハ名い出えつも語いつゝり
ゞト部兼倶卿の三社託宣とゝあいつゝ物ふて佛語と

及て漢文の對句ふ〜る下を細工ゐ〜師翁の託宣考ふ類聚三代格とゝて嚴くらゝとゝゝ

鳥羽変文

師翁の云く大鷲もふゝも羽ゑ変文ゐゝ切文凡黒凡白中白中黒本白本黒雪白黒津羽護田鳥文尼面ちどい定ゝゝる変文ゑゝ常ふ出ゝ変文ゝゐ〜出来ゝゆゐゝ予ゞ家の門上ゑ鳥二やゞゝ一いゑ羽ふ白羽文ゝゝゝゝ予ゞ同僚ゐゝ成瀬某ゞ土蔵の屋の間ゑ巣くひて子ゑ産ー雛の中ゑ白雀一あゝと語ゝゝゝ又先つ年予柳営ゑ上ゝー日田舎ふて白雁ゑ黒文ゐゝを生捕ふゝて籠ゑとめて毎ゝ旬のまゝーとゝゝゝ常ゑ変文ゐゝ

傍廂三ノ上ノ十六

まゞ見れゑ変文なゝべ鵰鷲ちどい常ふ変文ゐる物ちゝゝ
さまゞ〜ゝ量ちるべきゝ天生自然の変化ふて定ゝみけゝべ奇
怪の文又再ゐゝゝゝいひゞ〜ゝちゝとも定めゞ〜〜以上貞文翁矢羽文考の文といゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝふゐゝゞゝ下絵葛飾北斎木村勧花といゝら
者白黒班文ちる鳴と生捕ふゝて来ゝ秋ゝ出せてさゝ芝の

あるうの大度へ招ぎるとはのあるうえをうを者今はのぐへなり
又大和小路の上屋敷の吾流の結處の庭へ頭尾白紅花の白腹等
が釋者より受うて二、三日来りつまどを後ふつりえを人や捕うん
我若年のひの射術の所なる吾流慶御門川兼寸弟右流方よひ
めるる八幡舞と又る羽一枚あり大ゴの中志の愛文なるべ吾
流を故ありて弓術免許の地なるまべ武士いさゝと農民商人神司
法師医師よりうまで的射せざるの者は流羽の巧ゑを
江戸も及ぶべきまど実の愛文と流羽ふらべる処なり波八幡舞
八実の愛文なり

多ひ。うう。ときあ。みうへゆうど

傍和二三ノ　十七

この四とゝ説き得る人古今一人もなし古老大人さちも難義と
せれうる多ひ八茶毘師ふて今ハ隠亡ゝうゝ屠兒等ふて
名ゝうふまべ今ハ穢多なりうきあ長女筬女おどゝうゝ泄なり
とまハ藏ふて道路よ出てある様まとるれとまむるものゝうゝ
いやうどい御厠入ふて閑所の掃除人ゝうまゝいやゝ紀者のうぎ
ゆまとゝうゝなり

後世の旋頭哥

万葉集ハ更ゝ古今集も古格正しきと續千載集ハ俊成卿「み
どりゝと。岩ひ一人も。光ぬゝそ。そむゝ世をゝる。かゝ。さハ。夢うゝう。
ひ一首のうゝ定うあぬゝ人ゝ五七。五七。五七ふて旋頭哥のうゝべふ

あるぞこの方のえしに隆信「あらてふれ。爰も枕いとでかく。とれ
まし。君ぞこゝる世よ。そむぐらせべ。とま五七。五七。七七ふてたぐうきれ
ど、句めの五七七まとバ句綱ちわへまど旋頭歌の体歌まゝ
ぞそい旋頭の歌ちまとべ上句五七七。ふていひ切てまと下の句五七
七ふていひきりて上へうへぬゆ万葉古今ぞど悪く強りよく
もえ給ぞして旋頭歌の尋常の歌まゝ一句多くして六句まむ
ゆとのとかもわ強ひつゝうん

きさきの

きたるのい好色人のゆえ古今集まゝ「梅の花ちりて後のみぶれを
やきさきあとのこゝ人のつゝんとまゝ身と実といひうみ好と強とひ

うけあり伊勢物語ぶ見いそこのむとりくまきたれ枕と簾の内ち人人
のいひけるとゝ仲文集まゝ「きたれ枕花のたゝふよせざゝべこのと
とふ門も絵ぐえせまーや。うつほ物語まゝ如のなる所ときてを
きあどもいあるゆんとそゝ紫式部日記まゝ「きたれ枕と名ぢ
ゝまべこゝ人のとゝぐらいあゝどとぞおゝかゝ「人ふまぐを
らまぬ花とゝれゝこのきたれ枕ぞゝ日ちゝしけん枕草子まいと
きたれ絵へうおぐゝちちゝつせゝ。あよ行物語まゝきたれあひ糸
らせんゝ物語文ふいなまとあゝ綱ふてまとい枕ぢまりおゝりて来
ちまきくゝきたれが内おど給ゝふゝ物ぐきちる醉れるお
どゆゝの所ふもかゝりゝあゝ物語文ふいまあぐちて好ぢぐま

しきと放さるる所ふもかる紅葉源氏明石入道が振よりて家よ
りみとをれば世やとまるも雖狂なるいにぬ世話おどりふて
好きのみふいあるぞ又うりて色情小限ぞ行事ふても心
小涼くあるてなめるみとほといくまう芳若を続ぶ人をうれて
心と涼くあるひる友よ好の花といるとなまうふ涼くあるうて牧千
里隔さる外戒の器まと牧百年経る書画おどあであつめるまど
飲食の美い清く称ふるとうそびきとうるぬ隈まぞきぞうれと
め出さと功せうさる友よ好も牧寄の家となて今の世
ふてい茶のみは委く古人の筆おどうあさんやまど実の
ようあるぞ先達のうて流よあどび守まるのこふて

松の花

我若き比田中勇甫和棟ゞ許よりる折ゝ竈神小年らんとて
花菖蒲のもて来る小松一すと笑るとうまびゝ牧の傍小只一ツ

花咲て白小花小て榊花樒柑花おどの如くなる物小や
秋ら始て冬ら時珍云二三月抽一莖生花長四五寸采其花蕋為
松黄食物本草注ゑ松花一名松黄味甘温無毒云々

醴泉

持統天皇紀七年醴泉涌於近江國益須郡都賀山諸疾病停
宿益須寺而療差者衆云々又續紀養老元年天皇臨軒詔
曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覽當耆郡多
度山美泉自盥手面皮膚如滑亦洗痛處無不除愈在朕之
躬有其驗又就而飲浴之者或白髮反黑或頽髮更生或
闇目如明自餘痼疾咸皆平愈云々かゝるハ皆大國主神少彦名神

傍廂二ハ上ノ二十

このゆるせんいあるへうゝび狩待書画おどの世よをぐれてようゝきと
び行るゆ出ぞつゝをゝいやゝれと中くはしうて愛たやせうハ実のよ
しあとをゝぞ先きのあゝをゝふきづめる故ゝさうハ実の菓人
といへべうゝぞまいゝ具菓菓人とゝべきやゝれりてあそびと
ぞをうふゝふ

さび

さむハ生飯散飯三飯早飯おどうけとど皆うゝ文字ゝ梵語か
れば若ゝ一盛と菓ゝ盛ゝ上ゝ又盛とちひさく丸めて上ゝかく
とゝ佛家ゝて僧徒の食をゝ盛ゝ先此さびと乳て別器ゝ垂て
呪文を唱へ河利帝へ供ゝとの河利帝とハハ天竺ゝて食物を施

を指さる人とても佛家のおくりあるべ　朝廷ふても佛法御崇敬よ
さるべきもの　佛祖統記釈氏要覧ふどぶ正食とあるぶ同ド　塩嚢
抄ふも鬼神ぶ先供ぎる服とつくり　論語郷黨雖蔬食菜
羹瓜祭必齊如也注古人飯食毎種各出少許置之豆間地
以祭先代始為飲食之人不忘本也　禁秘抄ぶ取左波立箸
陪膳取御箸又立御箸折出也云々　後醍醐天皇日中行事ぶ
御さぶとろてわまぶつぶ入てそさせ給ふ陪膳坐ふてそのこと
をめてこしとあり　朝廷へ入らるゝぶかとくも神宮へ移ぶて豊受
宮御饌殿ぶ左波の壺とつく物あり　稑らつき事い神官人もあり
ぎぶ初服とろちて別器ふ入て祖神ぶ奉るぶとのこ云へり

傍註三ノ上ノ　二十

二神の御ちぎふて世の人の疾病を愈さめんと給ふ御恵の奇く
妙なるぶ人智のちろちぶべきかぎりふらぬぞ

知行

武家社院等の知行孫金のひい何丁何段と云定めあり　室町の
ひちぶ永銭何貫何百文とつく定めありしと　御當家ぶ何石何斗
と定め給へり　永樂銭十貫文い今ぶ十文ふあるぶ二斗五升入ふて
即百俵ぶなるあり

たぐらめ

源氏末摘花巻ふたぐらめの花のごとかいれりこのむ云々此たぐらめ
いかい赤くとひとく赤きぶ花者の鼻の赤きぶたぶ人るぶし

いゆえなぐいろある花ともひゐぞ古人の注釈もあり新撰字
鏡ハ草タバとあるのことふて行の花とつくるまぐさのい辛荑
あるゝんゝ格物編ハ辛荑一名候挑とあり時珍云紫苞紅焰
作蓮及蘭花香和漢三才圖會ハ曰幣辛夷とあり新撰字
鏡ハい字書ハ用ゐまぬめづゝ紀字あり

徂徠ガ病中

荻生茂卿ガ病中ハ松岡玄達成章とつくるまでしより茅ヲ湯ハ
時の包紙ハ調合進申竹藥湯生姜一片煎如常平生食物肝
要事唯許牛蒡与大根と出さうなりしろき待あり初勺と結勺と
ヒ代まべいづまの病ひ行の茅ハも用ひらべき待ヒ

傍廂二ノ上ノ二十二

将棋

門弟相賀ハ城後彩発多の人ヒ我方ハ来ヒて種〻相語のつゐで
ハ家ある小児どもの戯まつぎハも将棋いきびゝくいまゐ歩りと
なり手故を問バ敵を取ハ戦場ハて敵と対死ハ死ヒ手と
らまゝ敵方の兵ヒなりてたゝくハ表裏二心の不忠ものあり
さる不正のなぐさとせんより和の戯まあまとなるべゝそいまゐめ
ハりとなりいろハもさるあヒ碁ハ黒白ハてまべかゝ
忠ハなるがゝゝてゝひぬまかとつゝよりひそハ墨ぬて白
ヒまる方ハ用ひさゝばたゝんゝそゝなりむゝ足利尊氏卿新
田義貞朝臣ハ打まゐて武家勢官軍へ降参のはハ笠印の二引

去の中と墨ぶてぬりて中墨と云ふるとこそ分者り又條の辻ぶ宮
札をこそ三筋の中の白こをぬりつゝ初田さ云ひ笠ぶ立ぶると
かきこるよ太平記ぶあり今の白石もさるこびもり

八神殿の焼失

安元三年四月廿八日 樋口富小路より出火ぶて神祇官ぶ及び御正
躰焼失ぬ師翁の玉勝間ぶ神祇官ぶ今
の竹屋町ぶ遷ぶ程をくしてつぶも取出させのへべきをそびのぶ
らせ〜ぶて佛像をのこるき物とぶもりて神殿をかとて給ふ
落き故ぶ其年の十一月ぶ法皇ぶ清盛入道の為ぶ多羽殿へぶ
こあられ給ひ後ぶ多羽殿ぶ同時ぶ法皇へうきま給ひ〜ぶ

まぶぶみぐまて君臣の名卑も父子恩愛もうせまて〜一天ぶ海
の君上ぶ武家の食客の如くぶ給ひ臣下の奴ぶ万乗の位ぶ
如く奏ぶ人けりて禽獣ぶ異ぶ給ひ保元平治ぶ乱をあて建
武以来ぶ〜慶長五年まぶぶ百五十余年さうぐ〜かり城
元和の比ぶ始て静ぶありて万民平安ぶ全く神社造営祭
祀礼奠厳重ぶ掟給ひてむりぶかへ給ひ〜ぶ給ひて
うぐ〜ぶき先蹤事実ぶきまどぶふ引出んもうぐ〜い
けまびとぶ要〜ぶ紀〜ぶ重てこぶふ累けり

人名の魚

江戸の海ぶい人名の魚ぶり河豚の類ぶて鯛の婿三八郎とぶあ

を折ふしていふ源八と称する人もあり又海中の石にて空貝おなじく附る黒赤黄を苧びてやうふ丸き肉あり貝の頼と鹽又醤油などに附焼ふして食料とす是を新みなぎつといふ折ふしてもよ

新五左ヱ門
一名
尻子玉

尻子玉といふも尻子玉を閉ぢて新みなぎつといふ縁起なり
おなじく肛門より似る物よりあんあり又鮫の頼より角を出すなり

鯛の耳
源八

亀の頼ふ正覚方といふなり笠子といふ魚を安市丹と菜名とよべり鮒を添ふ郎鰯をおむとといふ亦きき矣名なり

水仙山

大和国宇陀郡市場村より水仙山といふなり是を綾靖天皇の御陵なりと俗綾靖を誤て水仙と唱へ来りを後世ふいなりて神保を猪熊和泉折ふなりしかふ又誤りて猪塚といふなるものあるべしいふへも万葉集なる桜漬玉兎系彩芦屋里の少女とうふひ男とちぬ男と妻諍しるを少女心うく思ひて自殺なる故ふ塚をつくりてとあ塚といひしを堀川百首ふ「ものあ塚」なる人ふかる柴舟の小げよなるまやなる方のあれと誤りなりなる

一説ふい瀬川求馬ゟ所ふて血戦〻ゟ故ゟ少女と求馬ゟ誤ゟ
〻〻といへい附含の説ふて主従塚と同日の終ゟり

傍廂二編巻之上 終

傍廂二ヘ上ノ二十五

国立公文書館
National Archives of Japan